



「変革」。世の中の動きは非常にめまぐるしく大きなかけ声だけが一人歩きしています。そうした中で大学をめぐる環境の変化も著しく、本学に課せられた使命もますます大きなものとなっています。学生の教育を旨としながらさまざまな意味で本学が地域社会の拠点となるためには、地域におけるいろいろな声に耳を傾けながらも流れを止さず進むことなく、基本に立ち戻ってなすべきことを着実にやっていきたいと考えています。

特集 NEW WAVE T.G.U.

学長・学部長対談	— 1
同窓生を訪ねて	— 5
歴史を伝え、今に導く	— 6
協奏、そして共創へ	— 7
学長室より	— 9
大学院より	— 10
学部より	— 11
国際交流部より	— 13
研究所・センターより	— 13
図書館より	— 14
入試センターより	— 14
就職部より	— 15

特集  
「学長・学部長対談——東北学院大学と地域（連携・貢献）」

# ウーラノス

ウーラノス

「ΟΥΡΑΝΟΣ(ウーラノス)」は、「天」を意味するギリシャ語です。使徒ペトロは、祈りの時に不思議なものを目撃します。新約聖書は、その場面を「天が開き、大きな布のような入れ物が、四隅でつるされて、地上に下りて来るのを見た。その中には、あらゆる獣、地を這うもの、空の鳥が入っていた」(使徒言行録10章11-12節)」と記しています。この個所にも οὐρανός の語が用いられています。

Vol. 17

2004

OCTOBER

TU 東北学院大学 広報誌  
TOHOKU GAKUIN UNIVERSITY

# 東北学院大学と地域～連携・貢献

地域貢献への取り組み、地域に果たす役割とその現状



## 対談者

学 長 星宮 望  
副学長(総務担当) 関谷 登  
副学長(学務担当) 大塚 浩司  
文学部長 平河内健治  
経済学部長 遠藤 和朗  
法学部長 斎藤 誠  
工学部長 鹿又 武  
教養学部長 佐々木俊三

## 司会者

経済学部教授 原田 善教  
(本誌編集委員会編集長)

## 場 所

土樋キャンパス本館学長室にて

## はじめに

**司会** 本日は本学が地域に対してどのような役割を持っているのか、あるいはどのような貢献をしていくのかということについて活発に意見の交換をしていただきたいと思います。

それでは、まず星宮学長から本学が地域に果たす役割と貢献についてお話しいただきたいと思います。



学長  
星宮 望

**学長** 本学を含む私立大学を取り巻く環境は大変厳しいものがあります。一つは18歳人口の著しい低下、もう一つは国立大学が今年度から法人化されたことが挙げられると思います。ここに平成7年12月20日付の新聞記事があります。これは当時リクルート社が、この先18歳人口が著しく減ることにより、大学・短大

への進学率が上昇するとしても、近々大学全入時代が到来し、2009年には定員割れすると予測した記事です。今から約10年前のことですが、まさに予測通りのことが起きています。私立大学連盟の学長会議でも、そのことについて意見交換をしましたが、やはり各大学とも危機感を持っており、新しい取り組みに力を入れているということでした。そういったことから考えますと、他大学との差別化を図るためにも、本学が以前から取り組んできた地域貢献の重要性がますます大きくなってきてと言えます。今後の大きな取り組みとしては、来年度に教養学部の改組で「地域構想学科」が設置されることが挙げられます。それ以外にも、それぞれの学部で、さまざまな取り組みをしていただいていると思いますので、その辺をご紹介いただきたいと思います。

## 地域貢献の現況

**司会** 各学部の取り組みをお話しいたきたいと思います。

**文学部長** 文学部としては三つほど地域に対する貢献を行っています。一つは、



文学部長  
平河内 健治

公開講座、県民大学、大学開放講座といった市民に学習の機会を提供する講座を行っています。二つ目は各学科の取り組みで、キリスト教学科は地域の教会への貢献をしています。これは建学の精神を地域にも浸透させ、地域の方々のサポートを得ながら自分たちの夢も実現していくという地域貢献の形です。史学科では先生方が、さまざまな地域の審議会委員を務めたり、地域の文化を保存・発展させていくためのアドバイザー的な役割を引き受けています。英文学科では英語教育に関して、学力の問題や教授法についてのアドバイスをっており、シンポジウムなどにも参加しています。

最後に、昨年の8月に仙台市教育委員会と連携協力に関する覚書を交わし、文学部英文学科の学生と教養学部の

英語教育に携わった学生、あるいは関心のある学生に外国人留学生を加えて、小学校の英語活動の支援を開始したことが挙げられます。国際理解を深める英語教育活動にボランティアの学生を派遣するという形で、昨年は20名、外国人を入れて30名の学生が参加しました。この取り組みは、小学校の英語活動支援をするだけでなく、個人的にも社会的にもコミュニケーションが上手にできる人材を育てることに役立っています。



経済学部長  
遠藤 和朗

**経済学部長** 地域との連携も含めてご紹介いたしますと、まず一つは学術資源の地域社会への開放として、市民の方々を対象としたシンポジウムや公開講座を行っています。経済学部の公開講座には三つの種類がありまして、一つは社会福祉研究所主催のオープン・カレッジ、これは25年続いており、毎回100名以上の方々が受講しています。もう一つは、平成6年から経済学科と経営学科が一年おきに担当している公開講義です。それから今年で4年目を迎える、みやぎ県民大学開放講座があります。

また、行政と産業界と教育の連携という観点から、あるいは産学交流という観点から見ますと、経済学科の特殊講義があります。これは行政や産業界から講師をお招きして授業を担当してもらうもので、これまでも宮城県知事の浅野史郎氏や県庁職員、東北産業経済局の方々、各企業の経営者の方々などをお招きしており、野村證券からは講座を提供していただいております。さらに、産学交流として経営学科が平成13年度にインターシップを導入し、平成14年度からは総合講座としての単位認定も実施しています。経済学部では生涯学習時代の要請に応えるため、平成12年度から昼夜開講制が実施されていますが、実態としては、まだ社会人が少なく、地域の社会

人や主婦の方々が学ぶ機会が増えるような工夫をしなければならないと思っています。



法学部長  
齋藤 誠

**法学部長** 本学に入学してくる学生の出身地は90%以上が東北6県から、そして約65%が宮城県からで、本学は存在自体が地域貢献になっていると言えます。地域の学生を集めて、きちんとした教育をして送り出すということ。そういう意味での地域貢献がすべてのベースにあるわけで、法学部としてもその点は強く意識しています。その教育の延長に、今年度からスタートしたロースクール(法科大学院)があります。これは、法学教育一般だけではなく法律専門家を養成する地域密着型の機関が必要という声に応じて設置されました。その地域にない、あるいはほかには期待できない教育・研究機関をつくるということ自体、非常に大きな地域貢献であると言えます。

また、法学部の特色から、先生方が県や市などの各自治体の審議会や懇談会などに参加することが多いようです。組織的な地域貢献としては、公開講座や講演会などを開いていますが、経済学部や文学部と比べると、まだ規模も小さく動員力もアピール力も弱いというのが現状です。



工学部長  
鹿又 武

**工学部長** 法学部長が言われましたように本学が地域で活躍する人材を育成してきたことは非常に大きな意味を持つことですし、本学工学部の卒業生なくして地元企業の開発は成り立たないと言

われるほど多くの人材を輩出してきたと思います。特に教育界では、東北地方の中学校・高校だけで400人以上の教員が活躍しています。

また、工学部の先生方は、国、県、市町村の審議会委員を務める機会が多いのですが、市町村のメンバーの中に本学工学部の卒業生がいるようで、そのような公的機関にも多くの人材を輩出してきたのだということが分かります。

具体的な地域貢献としては、まず生涯学習にかかわるものがあります。みやぎ県民大学開放講座は毎回定員50名に対して100名近い受講者が集っています。さらに最近では、出前授業という形で21世紀型の新しい技術、例えばロボットについての授業などを高校に出かけて開いています。これは高大連携という形の貢献であると考えています。もう一つは、平成14年に工学部が先導的な役割を果たして「産学連携推進センター」を開設したことです。具体的な数字はまだ出ていないのですが、最近では共同研究や委託研究が急激に増え、事務処理が追いつかないほどになっております。そういう意味では産学連携も着実に進んでいると言えると思います。今後は地域社会との距離感を縮めて、さらに着実な地域貢献をしていきたいと考えています。



教養学部長  
佐々木 俊三

**教養学部長** 他学部比べると教養学部は設置から16年しか経っていないため、取り組みは少ないのですが、「地域構想学科」を立ち上げる準備に取り組んでいることが地域貢献の一つと言えます。

教養学部はもともと教養部からスタートしており、文理総合学部という形をとっていますので、学部の理念にも学問の学際性・総合性を謳ってきました。本学部では一つの問題をさまざまな分野から解き明かすために学部の共通科目として

現代社会の諸問題を複数設定し、学生自身の意識改革に取り組んできました。また、ボランティアという科目も設定し、学生が社会の現場に立ち現況を捉えてくるといふ教育プログラムを策定しました。このプログラムを地域構想という形に発展させていこうと考えています。まだ成果という形では出ていませんが、今後も地域で、さまざまなことを体験し経験して、それを大学で組織し進化させていくという教育プログラムが来年に向けて定着しつつあります。みやぎ県民大学開放講座や公開講座にも取り組んでいます。教養学部として特に主張できることは、学部の理念が地域構想学科の開設に発展したということだと思います。

**司会** 各学部長から、ひと通り現状をお聞かせいただきましたので、両副学長からコメントをいただきたいと思います。



総務担当 副学長  
関谷 登

**関谷副学長** 本学が実に多様な形で地域とのかかわりを持っているということが分かりました。ただ、今、大学が要請されていることとの関係で言えば、今後さらに可能性を広げていかなければならないのは、専門家の養成、あるいは一度送り出した人材に対してさらに先進的な教育、時代の要請に応える教育を提供することだと思います。いわゆるリカレント教育と呼ばれる分野に積極的に取り組み、提供する準備をした上で、社会に対して本学がそのような可能性や潜在的な能力を持っていることを発信していく必要があると思います。

また、本学はたくさんの卒業生を輩出していますが、地域で学生自身の顔があまり見えないという気がします。本学に約1万3千人の学生がいますが、在学生たちの地域とのかかわりが若干希薄に感じられます。ボランティアなど学生が社会とのかかわりを持つ機会を増やしていく必要があるように思います。

それから私自身いくつかの自治体の審議会などにかかわったことがあるのですが、そういう形でのかかわりでは、どうしても行政の枠の中での断片的な発言の機会しか与えられません。しかし本学は、総合大学として人的、物的資源などの大きな潜在能力を持っているということを発信しながら、この地域をリードしていくべきではないかと思っています。



学務担当 副学長  
大塚 浩司

**大塚副学長** 本学には既に13万人の卒業生がいて、たくさんの同窓会支部があり、実際にそれぞれの支部が活動をしています。このような同窓会組織をしっかりと持っている大学というのは大変珍しく、それは非常に大きな財産だと思います。本学は、それを通じても地域貢献を果たしていると思います。

ただ、工学部出身者としての視点ですが、本学の現在の体制を、地域貢献に取り組みやすくするために、少し改良すべきだと思うのです。例えば、大学には知的財産がたくさんありますが、それを地域に還元しにくくなっています。地域の企業に協力しようというときに、その技術に対するある程度の見返りを大学に入れていただくのですが、今はそれが入れにくいのです。つまり、そのような技術の提供に対する資金の受け入れについて細かい制度が整備されていないのです。また、その知的財産をしっかりと管理していないと提供することもできません。現在、知的財産は教員自身がそれぞれに管理しています。つまり本学全体にどれだけの知的財産があるのかを誰も把握していないということなのです。社会に対して貢献するなら、本学における知的財産を整理・管理し、広くオープンにしておくべきだと思います。

## 今後の課題と取り組み

**司会** 現況を踏まえた、これからの課題についてお話しいただきたいと思います。

**文学部長** 文学部のボランティア活動への取り組みとしては、先ほど述べた英語活動があります。昨年からはじめて今年で2年目になりますが、ボランティア活動をしながら学ぶ、サービス・ラーニングといったことが一つの課題としてあると思います。また、グローバルな時代においてこうしたボランティア活動の領域をアジアなどへ広げていくことも大切だと感じています。それから学生のサークル活動として、音楽活動や演奏会、演劇などで文化を創造するという貢献も果たしてきており、それらをさらに発展させていければと願っています。昔は、東北学院の伝統として英語劇がありました。これは学生も教員も一緒になって、公会堂などを使って行っていました。市民やGHQの人たちも入って劇を楽しんでいたそうです。そういった活動の伝統があるわけですから、文化面の活動も応援していけるような大学になればと思っています。

**司会** グローバルな世界へボランティアを発展させるとともに、地域における文化・芸術の担い手・発信者としての伝統を発展させていくという非常に興味深いお話でした。

**経済学部長** 各学部や各研究所が独自で公開講座や講演会、シンポジウムなどを行っていますが、こうした活動を一本化するために大学の組織として生涯学習センターのようなものを設置し、本学の公開講座やシンポジウムなどの活動を、市民に周知できるようにすることが望まれます。また、より積極的に聴講生制度を設けて、市民の方々に大学にまねくことも必要だと思います。さらに、高校生にも公開講座の聴講をすすめ、それが単位認定できれば入学後も有効となりますので、高大連携にもつながることになります。

**法学部長** 地域貢献をする場合に、啓蒙といいますか、初歩的なことを教えるという活動があります。それからもう一つは、すでにある程度知識を持った人に対して、より高度な内容を伝えるということがあります。前者については、いろいろなことを

幅広く学びたいという方のために生涯学習センターのような形で廉価な講座を組むということが有効だと思います。後者の再教育に関しては、大学全体で組織化するというのは難しく、やはり学部ごとにしっかりとプログラムしなければならぬと考えています。

それから資金的な面ですが、地域貢献はしたいけれど、その負担が大変でしかも資金的な見返りがないということになると、あまり長続きしないわけですから、採算を考えることも大切になってきます。採算がとれないまでも大きな負担にならない仕組みを組織化していくことが大切です。**工学部長** 地域に果たす役割としての地域貢献のプログラムを作ろうとするときに、大学を外側から見ると、やはり大学が頂点に立ってやっているように見えていると思うのです。地域貢献には、ともに学ぶという意識が必要ではないかと考えます。また、地域貢献は大学の戦略として取り組む必要があるのではないかと思います。さらに本学の地域貢献を広報していくためにも、地域と大学のネットワークを整備することも必要です。

最後に、大学の教員評価についてですが、評価は教育や研究でなされているのが現状です。評価の中に地域貢献も加えていかないと全学的な広がりにはつながらないと思います。

**教養学部長** 関谷副学長が「学生自身が地域社会の中ではっきりした貢献をしている顔が見えない」と言われましたが、このことは教育にとって大きな危機だと言えます。それは大学で学ぶモチーフを本当に持っているのかと問いたくなる学生が非常に多くなっているということです。そのモチーフは、隣の間人が喜んだり悲しんだり、泣いたり笑ったりするところに行ってみて、そこで自分に何ができるのか、あるいはそこに居合わせる事が自分にとって価値あることなのかということを、学生自身が感じ、考えることで進化していくのです。学生をもっと前面に出し、主人公として社会に送り出すことが必要だと思います。教養学部では、そのためのさまざまなプログラムを設定したいと考えています。

それから、生涯学習センターの設置は

大変重要なことだと思います。来年度、泉キャンパスに「地域構想学科」が開設され、たくさんの社会人が本学に入ってきます。その際、社会人を自由に受け入れ、社会人が自由にプログラムが作れるように体制を整えなければなりません。例えば、地域からスポーツ少年団が来て学んだり、NPOやボランティアとさまざまな横の連携をとるなどして泉キャンパスにたくさんの人が寄り集まり、キャンパスが一つのセンター化していくようなことになればと考えています。

また、大学と地域の連携プログラムという点については、大学での受け入れ体制を整えて、市民の学習意欲を高めることができれば願っています。

**経済学部長** 経済学科の特殊講義を市民が自由に受講できるようにしたいということがあったのですが、学則上の問題でできませんでしたので、聴講生制度を復活させて各学部の特色ある講義を市民の方々が安価で受講できるようにしたいと考えています。

**司会** 地域貢献を考えるときに開かれた大学というのがありますが、まずは大学の中に、より積極的に多くの市民を受け入れて、大学の中が多くの市民と学生で混在するような状況が一番望ましく、それが広く大学そのものが社会にとけ込むということではないかと思っています。

**大塚副学長** 経済学部長が言われた生涯学習センターですが、これは以前構想したのですが実現に至りませんでした。今ならできるとしますので、私たちの宿題としてぜひ取り組ませていただきます。それから学則上の問題もぜひ検討したいと思います。もう一つ重要なことは、工学部長が言われた教員の評価ですね。これは全学の問題として地域貢献が評価されるようにしなければならぬと思います。

## おわりに

**司会** 最後に、これまでの話を総括して学長からお願いします。

**学長** 皆さまから貴重なご意見をいただきました。学部にもたがるセンターのようなものの設置や学生についての意見、

そして教員評価も大事なことです。それから、工学部長が言われたように外との共生が大事というお話もありました。私は電子工学と医学の境界領域の研究を長くやってきたのですが、従来の医工連携は、お医者さんに工学側がサービスする一方通行でしたから長続きせずほとんど失敗してきました。でも、お互いに共生するという気持ちでかかわると両方の研究成果が伸びてくるようになったのです。新しい分野開拓に携わるときはやはりそのようなことが大事だと思います。

あえて言えば、キリスト教系の大学で人類への福祉ということを掲げてきているわけですから、私に近い分野で言えば福祉工学などというのは、良いキーワードではないかと思うわけです。

それから、私も東北大学にいたとき全学教育、教養教育の責任者になって、基礎ゼミなどさまざまなことを提案し問題意識を持っていたのですが、学生諸君が社会に出ていって社会に寄与すると同時に、そこから学び自分を生かすということをもっと積極的に支援していかなければならないと思います。



司会者  
経済学部 教授  
原田 善教

**司会** 多くの課題が提示されたように思います。これからそうした課題の実現に向けて努力していかなければならないわけですが、やはり問題はそうした取り組みに向けての教員側の意識改革とそれを支える大学の姿勢の変革ということに帰着すると感じました。

今日はたくさんの実りあるお話を聞かせていただきましてありがとうございました。

## 川北 智一氏



川北 智一(かわきた ともかず)氏

昭和24年仙台市生まれ。昭和46年東北学院大学経済学部卒業。昭和45年に開催された第13回全国空手道選手権大会団体戦相手の準優勝メンバー。昭和46年4月ロッテ商事(株)入社、同社札幌支店長、首都圏支店長、北海道総括支店長を経て、平成12年千葉ロッテマリーンズ運営部長に就任。その後、平成13年球団本部長としてロッテマリーンズの陰の立役者として采配を振るい、平成14年千葉ロッテマリーンズ球団代表に就任。昨秋にはバレンタイン監督の復帰とアジアの大砲・李承燁(イ・スンヨプ)の獲得に尽力し、パ・リーグの話題性を高めた。今年4月ロッテ本社へ帰任。

はじめに、川北さんが本学へ入学された経緯からお伺いしたいと思います。

私たちの年代は、宮城県や仙台の人を中心に大学進学をするなら東北学院大学という意識が非常に強かったように思います。また、東北学院は礼節を重んじる教育をしていることから、両親に進学を強く勧められたのを覚えています。このような環境で育った私は、東北・北海道における「私学の雄」として名高い東北学院大学に憧れるようになり、迷わず進学したのです。

大学生活の中で特に印象に残っていることがありましたらご紹介下さい。

空手道部での活動です。当時の体育会は、東北学院大学の長い歴史のなかでも全盛期だったと思います。東北大会で優勝するのは当たり前という感じで、どの部も練習は厳しかったですね。その中でも、最も練習が厳しかったのが空手道部でした。4年間その練習に耐えたお蔭で、礼節を身につけることができ、肉体も精神も鍛えられたと思います。「健全なる精神は健全なる身体(しんたい)に宿る」と言いますが、本当にそう思います。部活動は、自分本位の欲求を満たすだけの場ではなく、厳しい練習を通して精神を修養する場であると思います。これは体育会だ

けではなく、文化部も同じように厳しい練習を積んで展示会や発表会を行っていますので、どちらにも言えることです。部活動においても社会においても最も大切なのは、面倒見の心や世話役の心を持って相手を労わる心を持つことだと思います。それは上級生になるほど必要になってきます。実際、私の学生時代はそうでしたし、今も球団代表として常に心がけています。

部活動のほかに印象に残っていることはありますか。

ラーハウザー記念礼拝堂ですね。練習後、胴着を着たままで、よく時間を過ごしました。当時の学食は礼拝堂の地下にあったものですから行きやすかったです。誰もいない礼拝堂の後ろの座席に座って、何も考えずにスタンドグラスを見ているだけ。今思えば、礼拝堂が一番ホッとする場所だったのだと思います。球団代表のお仕事というのをご説明下さい。

各球団によって違いがあると思いますが、管理・営業・編成・スカウトなどといった球団の運営全般にかかわっています。大きく分けると、チームにかかわる部と管理にかかわる部、営業にかかわる部の3つの部門を総括しています。毎月、会議を開いてチーム状況と編成を検討し、ドラフト会議に照準を合わせて今年はどこが弱点だったかを追究し、2~3年後あるいは5年後のチーム将来像を徹底的に検証します。最低でも3年から5年までのチームを見据えて、新人選手を選択しています。また、その最終判断も行います。

本学で学んだことは球団代表の仕事に、どのようにいかされていますか。

球団に限らず一般企業も同じことだと思いますが、「戒め」を大事にしていきたいと考えています。礼拝やキリスト教学の授業で、まず相手の気持ちを知りなさい、まず相手の話を聞きなさい、と教えられました。それからすべてが始まると思います。まず人の話を聞いて、悪は悪、善は善と、はっきり自分で分けしなさい、という社会全般に通じる教を東北学院大学で

学びました。球団代表となってからは特に相手の話を最初に聞くようにし、選手だけでなく球団職員にもプロ意識を持たせるようにしています。

川北さんが考える“地域に密着した強い球団づくり”についてお話し下さい。

プロ野球というのはフランチャイズですので、地元にも密着し、地元のお客様がどれだけ球場に足を運んでいただけるかが重要になってくると思います。そのため、お客様に球場で観る千葉ロッテマリーンズの試合は特別だと感じてもらえるよう心がけています。例えば、マリーンズの応援は日本一だと多くの評価をいただいておりますが、その応援の中に入って選手と一体となっていたいだきたいと思っています。ここに来れば何か違うものがありますよ、というものを求め続けていこうと思っています。

最後に同窓生として後輩に伝えたいこと、本学に望むことをお話し下さい。

私は東北学院大学を卒業してから母校の良さを知りました。それは同窓生の絆が強いということで、私はそれを随分仕事に活かしてきました。私どものロッテグループにも同窓生が多くいますが、同じ会社でも同窓生となると、より親近感が増します。ですから後輩諸君には、部活動でも勉強でもボランティアでも何でもいから、学生時代にしかできないことを悔いが残らないようにやってほしいと思います。何か真剣に取り組むことは、さまざまな人脈を築くことに繋がりますので、失敗を恐れず積極的にチャレンジしてください。

母校に対しては、“東北学院大学ここにあり”というものを、もっと外に出してほしいと思います。全国的に名声を広げる努力をされて、東北・北海道の「私学の雄」にぜひ入学してみたいという受験生を増やしてほしいですね。これは野球の世界にも言えることです。北海道の選手でも沖縄の選手でも、このチームでプレーしてみたいと思われることが、球団のあらゆる意味での成長につながると思うのです。

我が母校の発展を期待しています。

取材/平成16年3月5日 仙台国際ホテルにて

“奇跡の人”とか“三重苦の聖女”と呼ばれたヘレン・ケラー(1880~1968)については、皆さんもよくご存知のことと思います。彼女は、88年の生涯のなかで三度、日本を訪れていますが、最初に来日した1937(昭和12)年には、東北学院も訪れ、現土樋キャンパス本館前で講演しました。同年7月1日のことです。翌2日の『河北新報』は、「感激に極まる構内」という見出しで、仙台市内から集まってきた学生たちに「理想を高く持って進め」と訴えたと報道しています。

ところで、この出来事は新聞記事でしかわかりませんでした。この度、この場面に立ち会った工藤陽國氏から、次の一文が寄せられました。貴重な「証言」ですので、紹介したいと思います。

午後三時半頃、太陽の光は強かったが西に傾き、校外は一寸寒い位ヒンヤリとしていた。礼拝堂ではなく、校門を背にして、玄関前の松の木から本館に向かって礼拝堂の間の狭い間に集合させられた。窮屈であったが、後を振り向くと校門の鉄扉が固く閉められていて、南六軒丁は、駆付けた仙台市内の男女の学生、東北帝大、二高、仙台高等工業、宮城女専、宮城、尚綱、三島学園の専攻科の学生で真黒になった。学院生だけなら礼拝堂で良かったと思うが、他校の学生にも一目だけでも姿を見せたい配慮ではなかったろうか。

午後四時頃だったと思う。出村悌三郎院長の案内で、トムソン夫人、ヘレン・ケラー、盲目の関西学院大学岩橋教授の順で、本館の玄関口から私達の前に現れた。ヘレン・ケラーの意思は指でトムソン夫人の手のひらをたたくことで伝えられ、トムソン夫人の発言を岩橋教授が通訳した。

ヘレン・ケラーは「拍手をして下さい」と改めて再度の拍手を求められた。学院生の再度の大きな拍手に手を上げられた。「集まっている学生は五百人位ですね」と話された。マイクロフォンが無くても岩橋教授の声は聴こえた。当時の学院生は第一学年は三年制、第二学年以上は四年制で、商科、文科合わせて四百五十人位だったと思う。ヘレン・ケラーは拍手の空気の振動で学生数が分かるとのことであった。ヘレン・ケラーもトムソン夫人も、背が高く堂々とした体格であった。トムソン夫人のキツネのえり巻が鮮明に目に残っている。盲目の岩橋教授がこがらだったので、特に目立った。

その後どんなことを話されたかは記憶にない。しかし世界的に有名な奇跡の人に、手の届く所で会えたことの感動は大きかった。それは鮮烈な場面で、今でも目をつむれば、臉に浮かんでくる。(『東北学院高等学部文科歴史科昭和十六年卒業同級生回覧随想録』より)



東北学院来校時のヘレン・ケラー(トムソン夫人 右)

以上、今回は、ヘレン・ケラー来校時の工藤陽國氏のリアルな証言を紹介してみました。なお、彼女は多くの社会福祉施設も訪問しましたが、仙台市の八本松にある宮城県ろう学校には、同校への訪問を記念して建てられた彼女の胸像があります。その下には、彼女が寄せたメッセージを邦訳した「暗きに観る眼、音なきに聴く耳、わが魂の誇りぞ、萬象の静寂と真闇を超えて」ということばが彫り込まれています。

## 公開クリスマスのご案内

土樋キャンパス・泉キャンパス

本年も、公開クリスマスを下記のとおり開催いたします。厳かな雰囲気の中での説教、礼拝堂に響き渡る荘厳な演奏をお楽しみください。多くの方々のご参加をお待ちしております。



### 第16回泉キャンパスクリスマス

パイプオルガンの演奏や聖歌隊の合唱、キャンドルサービスなどが行われます。また、小さなお子さまにクリスマスプレゼントも用意しております。

日時 平成16年12月3日(金)  
18時30分～

場所 本学泉キャンパス礼拝堂  
説教 下川義明牧師(日本バプテスト連盟仙台北バプテスト教会、平成6年本学言語科学専攻卒業)

問い合わせ先  
泉キャンパス庶務係  
TEL.022-375-1122

### 第55回公開東北学院クリスマス

聖歌隊と室内アンサンブルによるオラトリオ「メサイア」の演奏やキャンドルサービスが行われます。

日時 平成16年12月17日(金)  
18時～

場所 本学ラーハウザー記念礼拝堂(土樋キャンパス)  
説教 原田浩司牧師(日本基督教団富田林教会、平成9年本学人間科学専攻卒業)

問い合わせ先  
法人事務局庶務部庶務課  
TEL.022-264-6464

## ACUCA (Association of Christian Universities and Colleges in Asia

### ／アジアキリスト教大学連盟)の紹介と加盟報告

東北学院大学は、2003年12月、ACUCA (Association of Christian Universities and Colleges in Asia)に加入しました。この組織は、キリスト教に基づく各大学の特質を高等教育の実践にどのように具体化させるかとの課題に、アジア文化を共有する大学の相互研鑽によって取り組もうとして1976年に創設されました。日本のメンバーは、青山学院大学、同志社大学、国際基督教大学、関西学院大学、明治学院大学、南山大学、桜美林大学、桃山学院大学、聖学院大学です。延世大学や 梨花女子大学など韓国の大学や、香港、インドネシア、

フィリピン、台湾、タイのキリスト教大学を合わせると総数45大学です。

ACUCAは、国際会議やセミナーの企画、機関紙 ACUCA NEWS や研究誌 QUEST の発行など活発な活動を展開しています。例えば、2002年にセミナー「アジアにおけるサービス・ラーニング・ネットワークと高等教育におけるカリキュラムの創設」を国際基督教大学で開催しました。この時の成果が、山本和(国際基督教大学サービス・ラーニング・センター長)「国際サービス・ラーニングの取り組み」『大学時報』(日本私立大学連盟、2004年5月)に掲載されています。ちな

みに「サービス・ラーニング」とは「学生たちの自発的な意志に基づいて、一定期間、社会奉仕活動(サービス活動)を体験することによって、それまで教室で知識として学んできたことを実際のサービス体験に応用し、また、体験から生きた知識を学ぶ新しい教育プログラムである。学生は、国内外のサービス活動を行う団体でかなりの期間にわたり奉仕活動を行い、その経験から学ぶことをまとめて発表し、レポートを作成することによって単位を認定される」と紹介されています。このような相互協力による新鮮な教育的刺激を与えてくれる組織です。

## 約4,500人が東北学院大学を体感—オープンキャンパスを開催—

8月3日(火)、『オープンキャンパス』が開催されました。会場となった泉キャンパスと多賀城キャンパスには、約4,500人もの高中生や一般の方が訪れ、キャンパス内を自由に見学したり、模擬授業に参加するなど、“大学生”を体験しました。来学された高校生たちの声を交えて、開催の様子を報告いたします。

メイン会場となった泉キャンパスでは、本学のシンフォニック・ウィンド・アンサンブル(S.W.E.)とチアリーディングチームによるオープニングセレモニーが行われ、賑々しく開催の口火が切られました。キャンパス内では、多様な入試制度を詳細に説明する「入試説明会」や各学科・専攻の教育内容を本学教員と在大学生が説明する「学科・専攻ガイダンス」、大学での授業を体験する「模擬授業」などが行われ、来学者は熱心に耳を傾けていました。—「言語文化専攻のミニ講座に参加しました。外国人の先生が突然ドイツ語で話し始めたので、最初は何を言ってるの?という感じだったけど、簡単な挨拶などを教えてくれて楽しかった。大学生になったら英語以外の語学を勉強して自分の世界を広げたいです」(高校3年女子/宮城県)—



在大学生が行った「泉キャンパス施設ツアー」には多くの高校生が列を連ね、約30分に及ぶ主要施設の案内を受けていました。実際に、この場所で学んでいる先輩から受ける説明は、より彼らの感覚に近く、分かりやすかったようです。—「キャンパスがきれいですね。図書館も情報関係の設備もいい。法学部を目指しているんですが、やっぱりここで勉強したいってあらためて思いました」(高校3年男子/宮城県)—



教養学部教養学科言語文化専攻 ミニ講座「言語と文化」



泉キャンパス施設ツアーには、多くの高校生が参加しました

また、礼拝堂では3回にわたって「パイプオルガン演奏」が行われ、その荘厳な響きと礼拝堂の雰囲気は、来学者に対して、本学がキリスト教大学であることを深く印象づけたようです。

たくさんの入学希望者に接したこの日、本学教員、スタッフ、在大学生たちは、彼らを持つエネルギーに手応えを感じるとともに、彼らの無限の可能性を开花させ、成長させる一役を担う身であることを、あらためて実感いたしました。

## 大学と家庭をむすぶ―後援会総会と地区後援会を開催―

5月22日(土)に泉キャンパスを会場として、在学生のご父母を対象とする「後援会総会」を開催しました。当日は約1,500名を超えるご父母を迎え、総会では、大学の近況や年間の活動方針が報告されました。また、大学礼拝からはじまる「大学開放プログラム」も同時に開催され、多数の方々のご出席をいただくことができました。ご父母からの意見を踏まえ、大学と家庭の連携を深め、学生のより良い大学生活を目指して改革を進めております。また「地区後援会」も夏季休暇期間を利用し、北は北海道旭川市、南は静岡県浜松市までの計32会場で開催しました。大学の近況と今後の計画についてお知らせし、ご理解をいただくと同時に多くのご父母の方々との交流を深める機会を持つことができました。



後援会総会:泉キャンパス礼拝堂



個人面談:地区後援会



施設見学:多賀城キャンパス情報処理演習室

## 2年目に向けての法科大学院(法務研究科)の入試状況など

気軽に相談できる身近な弁護士を育てようと、本学法科大学院が4月にスタートしてから半年がたちました。その近況をお知らせします。

まず本学法科大学院が導入したたくさんの方の工夫はほぼ順調に動いています。例えば、「50分授業制」。しかも、同じ日に同じ科目の授業が続くこともありません。1回ごとの授業への集中力を高めることをねらったのですが、教員、学生双方から好評を得ています。さらに、すべての授業の映像と音声を記録し、病欠学生などに利用させる仕組みも軌道に乗りつつあります。この仕組みの拡充を柱とする本学の教育プロジェクトは、文科省の法科大学院形成支援プログラムと

して補助金交付の対象となりました。

7月下旬の前期末試験で一応前期の授業日程は終了しましたが、8月上旬と9月上旬には試験の解説や補講が行われました。9月13日からは後期授業が始まっています。

他方、来年度入学者のための入試については、今年6月に行われた全国共通の適性試験の受験者が前年より4割ほど減ったため、各法科大学院とも志願者減が心配されています。本学では、9月18～20日にA日程入試を行いました。35名の募集に101名の志願者(定員対応募者比2.9倍)となりました。来年2月にB日程、3月にはC日程の入試が行われます。



法科大学院・総合研究棟

### 「教養教育の再考—基礎ゼミの導入—」

学長 星宮 望

どの大学においても、平成3年の大学設置基準の改正（いわゆる「大綱化」）以降、専門教育の充実に走ったことに対応して教養教育が弱体化したとの認識があり、その対策が模索されています。ここに、一つの本があります。『自分—私がわたしを創る—』という題で、東北大学大学院教育学研究科の水原克敏教授が編集され、東北大学出版会から刊行された本です。通常、出版会の本は売れないのですが、この本は例外的に、出版後の1ヶ月で1,000部以上売れたほどのヒット商品になったそうです。

実はこの本、私が東北大学副総長時代に行った全学教育（主として教養教育）改革の柱として新設した「基礎ゼミ」の一科目の「自分」という授業の内容をとりまとめたものです。この「基礎ゼミ」のポイントは次のようなものです。①大学における勉学はこれからの未知のことへの挑戦に備えることが主であって、高等学校における勉強（典型的には、答えのはっきりしているものを正確に記憶し、高速で読み出す能力の訓練など）とは違うということに気づいてもらう。②全学部の新生約2,500人全員を20人以内の小人数グループとし、個々の異なったテーマの基礎ゼミに配属させる。原則として、すべての学部において必修とする。③

全学部と全研究所などすべての部局が責任を持つことにする。すなわち、これを担当する教官数は、それぞれの部局の教官定員数に比例させる。一部については、定年退官後の教官にも委員会での選考の上で委嘱する。④原則として、先生は知識伝達型の講義をしない。提示されたテーマについて、学生が調べ、まとめ、発表し、討論することを基本とする。報告書の書き方についても、その中で基本的な事項を身につけられるようにする。

このような新しい授業科目「基礎ゼミ」を正式にスタートさせる1年前に、およそ3分の1程度の規模で試行的に実施することになりました。そのときに、自ら手を上げて率先して試行に協力した先生の一人が、前述した水原教授でした。この本の中に、学生諸君の感想が無数に記載されていますが、それらを読むと、いかに現代の若い学生諸君が「自分探し」をしているか、また、自分の周りが「目に見えないベール」をかぶっているかが見えてくるように思えます。

我が東北学院大学でも、この「基礎ゼミ」のような科目を設定できないかを探りたいと思っています。また、『自分』の本にあらわれているような最近の若者像を我々教員がしっかりと受け止める必要があるように思います。

## 法学研究科

## 新たな使命

平成16年4月に全国各地の主要大学大学院に法務研究科(いわゆる「法科大学院」)が設置されました。法科大学院は弁護士、裁判官、検事といった法曹養成を目的とする専門職大学院です。法科大学院がスタートした今、法学研究科の主たる役割は、法曹以外の高度専門職業人と研究者の養成とに絞られていくことになります。国際化・情報化により法律関係も複雑化し、それに応じて法律学も専門化・細分化しています。現代社会が円滑に機能するためには、専門法曹以外にも、司法書士、税理士、公務員、あるいは企業法務に携わる人など、高度な法律知識を備えた専門職業人が広く必要とされます。そのような人材養成機関として、法学研究科の役割は重大です。

また、高度の専門的法律知識を修得し、キャリアアップを目指す一般社会人にも法学研究科の門戸は開かれています。社会人特別入試が実施されていますし、社会人も受講しやすいよう授業時

間の編成も夜間や土曜日の時間帯を利用したり、集中講義方式を採用するなどの工夫がなされています。

研究者養成も、これまでも増して法学研究科の重要な任務となります。法学研究科博士課程後期(ドクター・コース)は、博士課程前期(マスター・コース)での研究を深化、発展させる場です。学問研究の枠組み自体が揺らいでいる現在、新たなパラダイムを提起し、学界に貢献し得る研究者の養成は、法学研究科に課せられた社会的使命です。

法科大学院の教育目的は、よき『法曹の卵』の養成です。これに対して、法学研究科が目指すものは、「高度な専門的法律知識を修得した人材の幅広い育成」であり、加えて、「法律と社会とのかわりを学問的に探求する研究者の養成」です。このように、法科大学院と法学研究科とは、その理念と目的が異なります。両者の関係は競合的というよりむしろ、相互補完的といえます。

## 工学研究科

## 年々充実する教育研究設備と大学院学生の研究活動

工学研究科の教育研究施設機器は、文部科学省の私学助成金や科学研究費補助金などで年々整備充実されてきました。平成13年度には電気工学専攻のEMC技術教育センターに衛星通信実験システムや広帯域オシロスコープ等4点の実験測定装置が、機械工学専攻では高速高精度AIワイヤカット放電加工機、微粒子計測システムおよび高精細コンフォーカル顕微鏡が購入されました。平成14年度には土木工学専攻に水撃圧計測システムが、機械工学専攻に超高精度CNC三次元測定機が購入され、平成15年度には土木工学専攻に微小焦点X線マイクロCTシステムが購入整備されました。最近3年間に購入整備された1千万円以上の主な装置をあげましたが、これらの装置は各専攻の教育研究に有効に用いられています。また、本研究科では、平成15年度2名の博士(工学)と機械工学専攻7名、電気工学専攻12名、応用物理学専攻3名、土木工学専攻16名、合計38名に修士(工

学)の学位を授与しました。博士の1名はミャンマー連邦からの留学生、リン・キン・チダ女史で博士論文題目は「Application of Biotechnology to the Decomposition of Expanded Polystyrene Foam」でした。土木工学専攻博士後期課程に平成12年10月に入学し、石橋良信教授の指導で研究を行い、平成15年9月に修了しました。もう1名の博士は、応用物理学専攻の宮本克彦氏で、星宮務教授の指導で研究され今年3月に修了されました。博士論文題目は「光音響・熱顕微鏡を用いた非破壊検査および環境計測に関する研究」でした。2人のますますのご活躍を期待いたします。

本研究科院生の研究活動の成果は、国内外の関係学会で発表されています。学会出席・発表に対する大学からの旅費・宿泊費補助金の支給状況は、平成15年度の一年間で61名にもなります。その内、10名は海外で開催された国際会議に出席し研究成果の発表を行いました。

## 人間情報学研究科

## 近況

今年度の特別入試志願者はゼロで、来年度入学生は秋期と春期の入試で決定されることになりました。枠はまだたっぷりありますので、希望者は入試窓口お気軽にお問い合わせください。

人間情報学研究科では教養学部再編成にともなう人的資源の拡充を機に、研究科のカリキュラム改定を計画しています。実施予定年度は平成17年度ですが、それにあわせて作業を進めているところです。

具体的には、社会情報領域と生命・情報領域のコア科目、および基礎学科目群の科目が10科目ほど増えます。これによって、本研究科のカリキュラムが一層魅力的なものになるものと確信しています。

科目改定の変更内容については、まだ確定していない状態ではありますが、関心のある方は、事務窓口(泉キャンパス学務係)までお問い合わせください。お待ちしております。

## 法学部 近況

新年度に入ってから法学部の様子について、3つ報告します。  
(1) 専任教員スタッフの大きな入れ替えがありました。

まず、4月から本学でも法科大学院(いわゆるロースクール)がスタートしたことに伴い、9名の先生方が法学部から法科大学院へ移籍しました。阿部純二(刑法)、石垣茂光(民法)、梅津昭彦(商法)、菊地雄介(商法)、齋藤哲(民事訴訟法)、佐藤英世(行政法)、田沼柊(民法)、中村英(憲法)、藪口康夫(民事訴訟法)の各教授です。ちなみに、法科大学院の教員スタッフは、この9名の先生方に加えて、この4月に着任した5名の先生方をあわせ、合計14名です。

そして、移籍した先生方に代わって新しく4名の先生方が着任しました。黒野葉子(商法)、中林暁生(憲法)、松浦陽子(国際法)、宮川基(刑法)の各講師です。いずれも、本学が初めての赴任というフレッシュな新人です。これによって、法学部の平均年齢は、かなり下がりました。また、教員の補充はこれからも続き、来年4月にはさらに3名の先生方を迎える予定です。

(2) 学部長の中村英教授が法科大学院に移籍したことに伴い、新しい学部長に齋藤誠教授が就任しました。齋藤教授は昭和56(1981)年に本学法学部に着任、専門は政治思想史。3月までは、大学院法学研究科の法律学専攻主任を務めていました。また、法律学科長も交代し、伊藤一義教授(日本法制史)が新学学科長となりました。

(3) 法学部に付設されている法学政治学研究所主催の学術講演会が、5月27日(木)に行われました。この学術講演会は、国内第一線の研究者を講師に毎年この時期に行われているもので、今年で12回目となります。今回は、少年法研究で我が国の第一人者である國學院大學名誉教授・澤登俊雄先生を講



師に迎え、『最近の非行現象と少年法』というテーマで行われました。

当日は、少年の非行、少年法といった社会的にも注目をされている問題だけに関心も高く、150名を超える学生、市民が参加し、澤登先生のお話を熱心に聞いていました。先生は、最近全国的に話題となったいくつかの少年事件を取り上げ、それらに見られる共通の特徴を指摘しながら、同様の事件の防止、事件を起こした少年の矯正のためには、少年法の厳罰化は有効な方策ではなく、むしろ矯正施設、矯正プログラムの改革こそが急務であることを強調しました。講演の詳しい内容については、近く『法学政治学研究所紀要』に掲載されます。

## 輝く教育・研究

## 人類学的法研究

法学部(法律学科)助教授 三條 秀夫

近代法制は、18世紀以降にヨーロッパで構想された近代国家という共同体の枠組みを前提に、統治権力と市民の権利・義務からなる体系とすることができます。日本でも明治期にこの制度を継受して近代国家の仲間入りを果たしています。しかし、このような社会的枠組みを持たなくても、人間は安全で平穏な生活を送ることができ、法律を知らなくても生きることは可能です。それはなぜでしょうか。地域の歴史的背景や文化的な違いはありますが、そこには近代法制の枠組みとは違う何らかの社会的メカニズムが働いていると考えることができるでしょう。それを広い視野から記述することがこの研究の目的になります。

人類学的法研究(ないし、法人類学)は、広い意味での社会人類学の一部に含まれますが、まだ確立された学問領域としては認知されていません。しかし、かつて経済人類学者K.ポランニーが提唱したような「大転換」までいなくても、非西欧社会の現実から近代法制を批判的に検証する契機が提供できればよいと考えています。最近の数年間はミクロネシア連邦の小さな島をフィールドにして人々の生活を観察することに努めています。



クリスマス・セレモニー(コスラエ島)

## 工学部 ロボット教育への取り組み

近年、ロボットはより身近なモノに感じられるようになってきました。以前はロボットというと、空想の中のものか、工場で自動車を組み立てる腕状の機械、というイメージが強かったのですが、ペットロボットや掃除ロボットなどの形で私達の生活の中にも徐々に入り込んできています。

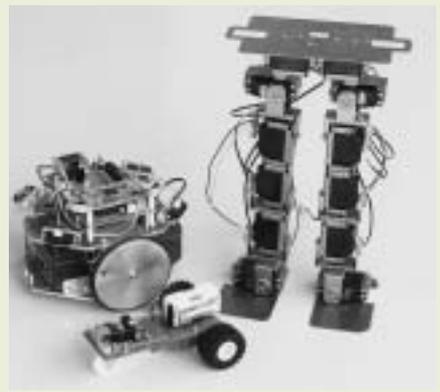
これらロボットを技術的に見ると、実は「動きのある家電製品」と同じような要素でできています。動作を生み出すメカの部分、そのメカへ電力を供給し状態を検出する電子回路、そして情報を判断して動作指令を出すコンピュータです。ビデオカメラや全自動洗濯機、パソコンのディスクドライブなどは、実はロボットと同じ技術の上であり、形や目的、理論が違うだけなのです。この総合技術をメカトロニクス(メカニクス:機械工学+エレクトロニクス:電子工学)といいます。総合的な学問であるためロボットへのアプローチは機械工学、電子工学、情報工学の各分野から可能で、本学工学部でも一般的に関連が深い機械創成工学科のほか、物理情報工学科でも扱われています。また、機械創成工学科の講義であるロボット

工学は他学科にも開放されており、他学科の学生も受講しています。

機械創成工学科では、これまで材料力学、流体力学、熱力学、機械力学、設計学、加工学、計測学といった機械の基礎科目、それらの応用科目の教育を行ってきました。モノを生み出すために必要なこれらの科目が重要であることはこれからも変わらないと



教材ロボットによるロボット実習(障害物を避ける走行制御)



教育研究用ロボットの例(車輪型、2脚歩行型)

いえます。しかし、昨今の機械のハイテク化、ロボット化を受け、電子工学、情報工学の知識も機械技術者には必要となってきました。この流れの中、機械創成工学科ではカリキュラムの改訂のたびに徐々にこれらの科目の導入、さらには必修化を進めてきました。具体的には、コンピュータ利用の基礎やプログラミング言語、それらを実際に用いて機械を解析するなどの情報系科目を充実させてきています。電子工学については、電子計測科目を必修化し、さらに平成16年度開始のカリキュラムからは再編してメカトロニクスとし、必修、選択の計4単位に拡充しています。既存の制御工学なども併せて学ぶことにより、ロボット技術に対応できるようになります。そのほか、1年生向けの導入科目の一つで、物理情報工学科の教員がロボットの初等教育用に開発した教材ロボットの活用も始めました。カリキュラムの検討は現在も進められており、旧来の機械工学とともに、よりヒューマンフレンドリーな機械や、ロボットなどの開発を目指す学生の教育にも、近い将来に対応できるようになる予定です。

### 輝く教育・研究

## 世界で唯一の小型電磁プラズマ風洞

工学部(機械創成工学科)教授 小池 和雄

水や空気などのように力を加えると容易に形を変えるものが流体です。人間に個性があるように、流体の中にもある特定の条件の下で特別な働きをするものがあります。プラズマはその一つであり、磁場中では特有の機能を発揮する磁気機能性流体の代表例として知られています。本学工学部の機械創成工学科には小型電磁プラズマ風洞が整備されており、その主要設備の一つである真空室内でプラズマ噴流を発生させ、これに超伝導磁石を用いて強い磁場を加えた場合の特性の変化を光学的計測により実験的に調べています。

この超伝導磁石は、プラズマ噴流が通過する流路に直交する高さ方向と横方向の測定孔から光学的な測定が行えるような構造になっています。そして、この小型電磁プラズマ風洞は、減圧下でプラズマ流の高機能化について研究する基礎実験装置としては最も強い磁場が発生できる世界でも唯一の装置です。現在、この装置を用いて、強い磁場によってプラズマの優れた個性をさらに引き出すための実験的な検討を行っています。

私のドイツ留学

ウィースバーデン大学にて

教養学部教養学科  
言語文化専攻4年 島山真知子

私のドイツ留学もあと2ヶ月で終わりを迎えようとしています。今思えば長いようで本当にあっという間の一年間でした。しかしたったの一年間と言えども、一生忘れられません。まず、ドイツ人はもちろん他国からの人との出会いは私にとって一生の宝物です。また、彼らを通して自分のアイデンティティ、つまり「私はやはり日本人で、私は私なのだ」ということを再確認したことも大変貴重な経験の一つです。そして、他国から日本はどう捉えられているのか、同様にアジア圏における日本、日本を離れ外国で長く生活して初めて日本の良さ・悪さを客観的に見ることもできました。

しかし、留学開始から3ヶ月間は前に

述べたことを考える余裕もなく、ドイツの薄暗く寒い天気と戦いつつ、ドイツ語習得に必死になっていました。そんな中でも、とにかく何事にも挑戦して物事をポジティブに考えるように心がけました。また家族や友達の支えがあったからこそ、あの辛い時期が乗り越えられ、今、毎日がとても楽しく充実しているのかなと思います。

もし私がドイツ留学をしていなかったらまずこのような体験はできなかつたし、この留学によって「自分」という人間を少しは強くすることができたかな、と思っています。

最後に、この経験が自分のこれから進む道にあるたくさんの穴や石をよけて歩くにプラスになるように残りの留学期生活を悔いのないものにしたいと思っています。



国際交流協定校と協定対象校\* (2004.4.1現在)

- University of Durham ダラム大学(イギリス)
- University of Ulster アルスター大学(イギリス)
- Fachhochschule Wiesbaden ウィースバーデン大学(ドイツ)
- \* Université de Savoie サヴォア大学(フランス)
- Nankai University 南開大学(中国)
- Pyongyang University 平澤大学校(韓国)
- Daebul University 大仏大学校(韓国)
- \* The University of Sydney シドニー大学(オーストラリア)
- University of New South Wales ニューサウスウェールズ大学(オーストラリア)
- \* The University of Victoria ビクトリア大学(カナダ)
- Ursinus College アーサイナス大学(アメリカ)
- Franklin and Marshall College フランクリン・アンド・マーシャル大学(アメリカ)

問い合わせ先 国際交流課  
TEL.022-264-6425/6404

第25回東北学院大学 オープン・カレッジのご案内

本学社会福祉研究所の主催するオープン・カレッジが、『福祉社会論』-知的冒険への旅立ち-と題して、学内外の10名の講師による講義形式で開催しています。皆さまのご参加をお待ちしています。

場 所 本学土樋キャンパス8号館  
5階 押川記念ホール  
受講対象 どなたでも自由に受講できます。  
受講料 1,500円  
(講義報告集及び郵送代を含む10講義分)  
郵便振替にて受付します。

問い合わせ先  
研究機関事務課  
TEL.022-264-6340

日 程 平成16年 9月30日(木)  
10月 7日(木)  
10月14日(木)  
10月21日(木)  
10月28日(木)  
11月 4日(木)  
11月11日(木)  
11月18日(木)  
11月25日(木)  
12月 2日(木)  
時 間 18時30分~20時00分  
(※9月30日及び12月2日の  
終了時間は20時20分)



## 図書館の近況

図書館には四つの役割があります。その第一は、図書・資料という形の「情報」を収集・整理・保管し閲覧に供すること、第二は、利用者のニーズの背後までも理解して「情報」の活用を支援することです。第三は、図書・資料という形の「文化」を後世まで、良好な状態で伝えていくこと、そして第四は、利用者がその「文化」を手がかりに思索にふけったり、ひらめきを得たり、心満ち足りる時を過ごせる環境を提供することです。第一・第二の役割だけなら、マイクロ化・デジタル化を進めるなどして最小限のスペースでも何とかできますが、第三・第四の役割を果たすには、一定のまとまったスペースが不可欠です。

現在、中央図書館はスペースのやりくりのため、職員はパズルのような作業を

して頑張っていますが、中央図書館分室や保管庫など5箇所に分散しており、利用者の方々には不便をおかけせざるを得ない状態です。多賀城キャンパス図書館も、満杯は目前です。

本学図書館には、貴重書や豪華本もあります。5月の後援会総会の折には、泉キャンパス図書館において、そのうちの5点を展示し、約450名のご来場を得ました。こうした展示は、今後も何らかの形で継続していく予定です。

また、6月末からは研究所等の図書資料の登録遡及作業も始まり、いずれは図書資料検索システムに反映いたしますので、皆様に活用していただきやすくなるでしょう。



泉キャンパス図書館

問い合わせ先 図書情報課  
TEL.022-264-6491  
URL <http://www.lib.tohoku-gakuin.ac.jp>  
E-mail [query@lib.tohoku-gakuin.ac.jp](mailto:query@lib.tohoku-gakuin.ac.jp)

## AO入試(A日程)はじまる

本学入試のトップを切って、AO入試(A日程)第一次選抜への出願が8月25日から始まっています。9月22日までの出願者数は次のとおりです。(カッコ内は募集定員)

なお、A日程の最終出願締切日は10月13日です。

### 文学部

英文・昼(30)	名
英文・夜(2)	名
キリスト教(2)	名
歴史(15)	名

### 経済学部

経済・昼(45)	名
経済・夜(5)	名
経営・昼(23)	名
経営・夜(1)	名

### 法学部

法律(35)	名
--------	---

### 教養学部

人間科学(6)	名
言語科学(6)	名
情報科学(6)	名
地域構想(6)	名

### 工学部

機械創成工(12)	名
電気情報工(10)	名
物理情報工(6)	名
環境土木工(10)	名



第一次選抜でA・B・Cの評価を受けた方は第二次選抜に出願できます。第二次選抜は11月12日に実施され、最終的な合格発表は11月19日に行われます。

また、AO入試(B日程)第一次選抜への出願期間は、11月19日から11月25日までです。

問い合わせ先 入試課  
TEL.022-264-6455

## 就職指導支援の活動状況

就職部から、現在の就職指導支援の活動状況について報告いたします。

皆さまご承知のように、学生の就職内定の動向にはピークがあります。第一のピークは5月の連休終了の前後であり、その次のピークは公務員採用試験、教員採用試験の合格発表の時期です。そして今がまさに第三の、比較的なだらかに続くピークの始まりです。といいますのは、10月を向かえ、内定辞退のアクシデントなどにより人事・採用計画の見直しのため再募集を凶る企業もあるからです。したがって、まだ内定を得ていない4年生はこれからがチャンスです。決して途中で投げ出すことなく、最後まで頑張り通してほしいと願っています。

3年生に対する、今年度初めて導入された就職部主催のインターンシップでは、約200名の学生が夏休み期間中に貴重な体験をすることができました。ここに、ご協力をいただいた77の企業や行政機関の方々に、改めて感謝申し上げます。今後は最終の仕上げとして、体験した学生とともに、インターンシップ報告会や報告書の作成などを行う予定です。インターンシップの実施にいたるまでには、昨年末の協力企業の開拓から始まり、4月の学生向けガイダンスや企業とのマッチング(外部委託)、マナーやモラルの事前説明会、企業との顔合せ会など、多くの経緯を経ており、私たち就職部にとっても、来年度以降に生かせる貴重な体験ができました。

先般、学生サポートセンター主催の講演者より「大きな声で交わす挨拶など、当たり前のことを当たり前に行う」、「身近にある幸せを探したら、いくつ見つかるか」、「一生懸命真剣に何事にも取り組み、諦めないこと」を説いていただきました。原点はそこにあります。

就職部スタッフ一同は、これらの点を踏まえ、就職指導支援の初心に戻り学生サービスにあたる所存です。皆さまの忌憚のないご意見とご協力をよろしく願いいたします。

### 問い合わせ先

土樋キャンパス就職課 TEL.022-264-6481 FAX.022-264-6486  
 多賀城キャンパス就職係 TEL.022-368-1101 FAX.022-368-1118  
 泉キャンパス就職係 TEL.022-375-1161 FAX.022-375-1534

### 教育研究振興資金募集のお願い

学校法人東北学院では、平成16年4月1日から平成21年3月31日の期間、次の事業の完遂に向けて教育研究振興資金を募集しております。広く皆さまのご理解とご支援をお願い申し上げます。

#### 【募金目標額20億円】

1. 東北学院大学キャンパス整備
2. 東北学院中学校高等学校校舎建設
3. 東北学院榴ヶ岡高等学校体育館および管理棟建設
4. 東北学院会館(仮称)建設
5. 東北学院育英奨学基金の増額

詳しくは、東北学院法人事務局財務部会計課までお問い合わせください。  
 〒980-8511 仙台市青葉区土樋1-3-1 TEL.022-264-6467 FAX.022-264-6510

### 東北学院大学

#### ■土樋キャンパス

大学院：文学研究科、経済学研究科、法学研究科  
 法務研究科  
 学 部：文学部・経済学部・法学部(各3・4年)、  
 夜間主コース  
 〒980-8511 仙台市青葉区土樋一丁目3番1号  
 TEL.022-264-6421 FAX.022-264-3030

#### ■多賀城キャンパス

大学院：工学研究科  
 学 部：工学部  
 〒985-8537 宮城県多賀城市中央一丁目13番1号  
 TEL.022-368-1116 FAX.022-368-7070

#### ■泉キャンパス

大学院：人間情報学研究科  
 学 部：文学部・経済学部・法学部(各1・2年)、  
 教養学部  
 〒981-3193 仙台市泉区天神沢二丁目1番1号  
 TEL.022-375-1121 FAX.022-375-4040

### 東北学院中学校・東北学院高等学校

〒980-0811 仙台市青葉区一番町一丁目9番1号  
 TEL.022-227-1221 FAX.022-227-6302

### 東北学院榴ヶ岡高等学校

〒981-3105 仙台市泉区天神沢二丁目2番1号  
 TEL.022-372-6611 FAX.022-375-6966

### 東北学院幼稚園

〒985-0862 宮城県多賀城市高崎三丁目7番7号  
 TEL.022-368-8600 FAX.022-309-2655



ウーラノス

東北学院大学 広報誌 vol.17

#### 広報誌編集委員会

委員長	総務担当副学長	関谷 登
副委員長	総務部長	高橋 征士
編集長	経済学部教授	原田 善教
委員	宗教部長	佐々木哲夫
	文学部教授	遠藤 健一
	経済学部教授	小笠原 裕
	法学部教授	塩屋 保
	工学部教授	石川 雅美
	教養学部助教授	塚本 信也
	総務部次長	菅野 健
	総務部調査企画課長	井上 捷二
	総務部総務課長補佐	斎藤 信二
	総務部調査企画課長補佐	小野寺芳典
	総務部調査企画課	石上 貴繁

東北学院大学広報誌『OUPANOS (ウーラノス)』に関するご意見・ご質問をお待ちしております。

発行日は、5月15日・10月20日・2月20日です。

発行日 平成16(2004)年10月20日  
 編集 東北学院大学 広報誌編集委員会  
 発行 東北学院大学  
 〒980-8511  
 仙台市青葉区土樋一丁目3番1号  
 TEL.022-264-6424 FAX.022-264-6364  
 URL <http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/>  
 E-mail [c.kikaku@staff.tohoku-gakuin.ac.jp](mailto:c.kikaku@staff.tohoku-gakuin.ac.jp)  
 印刷 株式会社エービー



古紙配合率100%再生紙を使用しています

この印刷物は環境にやさしい植物性大豆インクを使用しています。